特集すいよう

どこまで接近　本当に「英霊」を生むつもりか

靖国と自衛隊

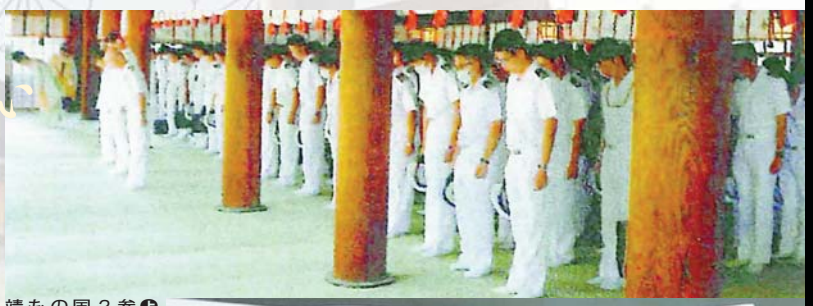
天皇制政府がすすめた侵略戦争による旧日本軍の死者を「英霊」として祭る靖国神社と、自衛隊との近さをうかがわせる出来事が相次いでいます。どこまで接近しているのでしょうか。

■靖国神社と日本の侵略戦争史

- 1869年　東京招魂社を創建
- 1874年　台湾出兵
- 1875年　江華島事件
- 1879年　招魂社を靖國神社に改称
- 1894年　日清戦争が始まる（～95年）
- 1904年　日露戦争が始まる（～05年）
- 1910年　韓国併合
- 1914年　第1次世界大戦に参戦（～18年）
- 1918年　シベリア出兵（～22年）
- 1931年　「満州事変」（中国東北部への侵略）
- 1937年　日中戦争が始まる（～45年）
- 1941年　太平洋戦争始まる（～45年）
- 1945年　連合国軍総司令部が神道指令
- 1946年　靖国神社が宗教法人に

新宮司に元海将　総代の元陸幕長「戦死したら祀って」

幹部ら集団参拝「毎年恒例なので」　次官通達に背く



上海上自衛隊の靖国神社集団参拝を報じた社報の『靖国』2023年7月号から　下『靖国』に掲載された元陸幕長らの論説。火箱氏も岩田清文氏も、自衛官が戦死した場合の靖国神社合祀を求めています

参拝を終え靖国神社から出てきた小林弘樹陸上幕僚副長＝1月9日、東京都千代田区

1月9日、陸自ナンバー2の小林弘樹陸幕副長（当時）ら陸自幹部による靖国神社の集団参拝を本紙は現場で確認しました。

小林副長は官用車の高級ミニバンを神社の行き帰りに使い、秘書らしき人物が随行していました。本紙の直撃取材に、小林副長は「毎年の恒例なので」と答え、毎年参拝していることを認めました。

海自でも練習艦隊の司令官はじめ初級幹部が100人規模で、遅くとも1998年からほぼ毎年、靖国神社を参拝していました。

陸自の参拝については、部隊での参拝を禁じた1974年の事務次官通達に違反する疑いがありますが、防衛省は調査で「私的参拝」と結論づけました。

しかし、日本共産党の穀田恵二衆院議員の追及で、陸上幕僚監部が、参拝スケジュールなどを記した「実施計画」文書を持っていることがわかりました。

一部を黒塗りにし、参拝は「私的」だったと主張しつづける防衛省。穀田氏は黒塗りがない原本の写しを示し、「装備計画部」が作成した文書だったことを明らかにしました。

穀田氏は「（装備計画部が作成した）事実を隠し、私的参拝だったなどと国会と国民を欺く調査結果を公表した木原稔防衛相、防衛省の責任は極めて重い」とただしました。情報隠しは戦前の反省から生まれた文民統制を危うくする重大な問題です。

靖国神社の門

靖国神社は1日、大塚海夫氏が宮司になりました。大塚氏は、元海上自衛隊海将。自衛隊の元将官経験者が、同神社トップの宮司に就任するのは初めてです。

一般の神社で氏子総代にあたる、靖国神社の「崇敬者総代」（10人）にも2人の元自衛隊幹部がいます。元海上幕僚長の古庄幸一氏と元陸幕長の火箱芳文氏（三菱重工業顧問）です。両氏とも、旧日本軍への回帰願望をたびたび、発言しています。

古庄氏は海幕長だった2003年に「海外派遣されても海上自衛隊では理解してもらえない。ジャパン・ネイビー（日本海軍）という本質で呼んでもらいたい」と発言した人物。背広組（官僚）が制服組（自衛官）を統制する文民統制（シビリアンコントロール）の見直しを要求したことでも知られています。首相の靖国神社公式参拝を求める「英霊にこたえる会」の会長です。

火箱氏は、旧日本陸軍将校、幹部自衛官などでつくる陸修偕行社の理事長でもあります。社報『靖国』などで「国家の慰霊追悼施設としての靖国神社の復活を願う」などと発言しています。『靖国』（昨年5月号）では「将来、国土を守るために戦死する自衛官が生起するかもしれない。（中略）一般公務死ならば防衛省の慰霊碑に祀られるが、戦死の場合それでいいのだろうか。筆者ならば靖国神社に祀ってほしい」と述べています。

ジャパン・ネイビー（日本海軍）という本質で呼んでもらいたい

「英霊にこたえる会」会長

靖国神社の復活を願う

国家の慰霊追悼施設としての

将来、国土を守るために戦死する自衛官が生起するかもしれない

戦死の場合…靖国神社に祀ってほしい